

練馬区子ども読書活動推進会議(第11期第四回)要録

日時：令和4年11月11日（金） 午前9時30分から午後11時30分まで

場所：練馬区役所1903会議室

●参加者

○委員（敬称略）

林、木村、工藤、関根、田崎、乾、内田、及川、中村

○事務局

山崎光が丘図書館長、松田子供事業統括係長、同係 渡邊、根本、
教育指導課 菅原サポート人材推進係長、同係 前村、小林指導主事

●議事等

1 開会

委員の紹介

2 議題

(1) 第四次練馬区子ども読書活動推進計画 令和3年度実績について

（学校図書館関係）

(2) 「次期練馬区子ども読書活動推進計画における小中学生の読書活動の推進」について

①ギガスクール構想と、学校図書館の利活用について

②中学生の読書活動推進について

●配付資料

資料1 令和3年度「第四次練馬区子ども読書活動推進計画」指標

資料2 令和3年度「第四次練馬区子ども読書活動推進計画」取組実施状況

参考資料1 「GIGAスクール構想の実現へ」

参考資料2 「教育だより」第195号

参考資料3 「教育だより」第198号

●会議要録

○事務局

定刻となりましたので、第11期第四回練馬区子ども読書活動推進会議を開催させていただきます。

それでは、座長、会議の進行をお願いいたします。

○座長

本日は、ご多忙の中、お集まりいただきありがとうございます。

ただいまより、第11期第四回練馬区子ども読書活動推進会議を開催いたします。

本日は終了を11時30分と予定しておりますので、皆さまのご協力をお願いいたします。

続いて、次第2 議題(1)第四次練馬区子ども読書活動推進計画 令和3年度実績(学校図書館関係)についてです。

まず、事務局より説明をお願いします。

○事務局

今回は、昨年度の振り返りを議題とさせていただきます。資料を使いながらご説明をいたします。

まずは議題(1)の第四次練馬区子ども読書活動推進計画 令和3年度実績についてです。お手元の資料1,2は令和3年度の「第四次練馬区子ども読書活動推進計画」指標と「第四次練馬区子ども読書活動推進計画」取組実施状況です。本日は主に、議題にもあります「小中学生の読書活動の推進」について、ご説明いたします。

まず「令和3年度「第四次練馬区子ども読書活動推進計画」取組実施状況」について、資料1をご覧ください。

(事務局説明)

○座長

事務局から説明がありましたが、議題(1)「第四次練馬区子ども読書活動推進計画 令和3年度実績について」、皆様のご質問等があればお聞かせいただければと思います。

ご質問などございましたら、ご発言をお願いします。

○委員

7月に配布された実施状況と同じ内容の資料と思われるが、改めて今回ご報告いただいたのはどういう意味合いでしょうか。

○事務局

資料は前回と全く同じ内容です。前回は乳幼児の目標1に関する実績報告だけを読み上げました。今回は小中学校の状況について口頭で報告しているものです。学校教育・小中学生の読書活動推進ということで、振り返りの意味でもう一度お配りし説明を行いました。

○座長

他に質問等ございますでしょうか。

よろしいでしょうか。

続きまして議題(2)の「次期練馬区子ども読書活動推進計画における小中学生の読書活動の推進」について、「①ギガスクール構想と、学校図書館の利活用について」です。各委員のご意見を伺う前に、ギガスクール構想について事務局より説明をお願いします。

(事務局説明)

○座長

次に委員の小中学校長・副校長からタブレット端末配布後の学校の状況など、お話いただければと思います。

○校長

小学校の教育会学校図書館研究部の部長をさせていただきます。

学校での状況を学校全体がどのように変わってきたか、もうひとつは授業がどのように変わってきたかという視点でお話します。

まず、学校がどのように変わったかです。ギガスクール構想自体、新型コロナウイルス感染症の影響でタブレット端末の配布がかなり前倒しで始まり、突然ひとり1台のタブレット端末が「突然やってきた」という印象が現場でかなりあるなかで取り組んでいます。リモートで家庭と結ぶことができるようになって、学級や学校閉鎖時にオンライン授業が可能になりました。感染予防で休んでいる子どもたちへクラスで行っている授業をそのままリモートで家庭に流すという方法も取りました。それから不登校の子どもたちにもオンラインで学校と結ぶツールになっています。新型コロナウイルス感染症の影響で学校行事など保護者の方たちに見てもらえなくなったものも、配信しながら進めてきています。そのほか小中一貫校という観点では、児童会と生徒会のオンラインによる交流を昨年行いました。

毎年外部評価である学校評価を行っていますが、今までの紙面評価・紙面提出からグーグルフォームス（Google のオンラインフォーム作成ソフト）を使って行う学校がほとんどになってきています。今後は学校だよりやさまざまな連絡など、プリントで配布していたものの効率化をしていければいいと思います。

校内では密を避けるため、全校集めての集会や行事などなかなかできなかったところ、全校朝会や集会などはずいぶんリモートを使いました。ただ通信の状況がよくなって時々画像が固まるなどはありました。今は全校で集まることもできるようになりましたが、クイズの集会など用途によっては今もリモートで行ったり、活用の幅は広がったと思います。その他各種会議や研究会もリモートで行えるようになって、移動しなくて済むなどのメリットはあると思います。

次に授業がどのように変わってきたかです。タブレット端末よりも先に電子黒板や書画カメラが各教室に配置されたので、それらを使って教材の提示や個人で作成した文書をみんなで共有するなどはすでに学校で行ってきました。そこにタブレット端末が入ってきたので、タブレット端末のアプリ、特に学校ではベネッセのミライシードというソフトを使っていますが、その中のオクリンクというアプリでは自分の意見や考えをすぐに共有できます。例えば、総合的な学習の時間でひとりひとりが探求課題を作り、その課題をどう進めるかという計画を立てるときに、タブレット端末画面で35名分の意見や考えを一覧共有できます。共同研究のときは、席を移さなくてもグループの課題を作るなど、タブレット端末上のつながりが既に子どもたちの間でできていました。このように自分の意見や考えをすぐに共有したり交流もスムーズにできるようになってきています。ドリルパーク（ベネッセのミライシード内アプリ）とか東京ベーシックドリル（東京都教育委員会の配信する電子版ドリル）などでは、ドリル型反復練習や個々に応じた対応がすぐにできるようになりました。たとえば5年生のどこかで躓いている子が4年生のここを復習したいといったことが簡単にできるようになります。ムーブノート（ベネッセのミライシード内アプリ）という自分の考えを

閲覧できるようなアプリがあり、そこでは意見交流や練り合いが高学年の一部では活用されるようになっていきます。

とにかく使ってみようという1年でした。ここにきて、どのような場面でどのようにタブレット端末を使っていくことが効果的なのかを深めていくような時期に入ってきたのではと思います。まだまだ教員によっても使い方の頻度に差があり、さまざまな課題があるので、みんなで一緒に使っていけるよう取り組んでいるところです。

課題としては、タブレット端末について文部科学省は「学習用具のひとつ」「文房具のひとつ」と言っていますが、家庭においてはついつい学習以外に使っているなど、まだまだ定着していないことがあります。気が付くとゲームに使っていた、SNSへの不適切な書き込みのようなことをしてしまう、それもまた現実です。情報モラルを段階的に発達段階に合わせて身につけさせていくということが学校では急務だと感じます。学校の状況は以上です。

○座長

どうもありがとうございました。次に副校長お願いいたします。

○副校長

よろしくお願いいたします。

本校での取組としては家庭との連携で非常によく使われています。学級閉鎖であったりコロナ禍であったり不登校であったり、そのような子どもとのやりとりのツールとしてよく使われています。小学部でも中学部でもパソコン室はほとんど使われなくなってきました。

具体的にタブレット端末がどう活用されているかという点、例えば理科の授業では、今までは成長の記録をスケッチにしたり文字に書いたりしていましたが、今は写真を撮るだけで自動的に記録されていき、それを見返しながら考察していくという作業が行われています。また、校外に出たときにもこれまではカメラを持っていくことがあったのですが、今はタブレット端末ひとつで写真を撮ってそのままレポートにまとめるというような活用もされています。理科の実験の記録をタブレット端末に入力することによってデータ化したりグラフ化したりということで非常に活用されていますが、教員によっては活用できたりできなかったりすることがあるので、今後共有していくことが必要だと思っています。

社会の学習においては調べ学習で活用されることが多いです。調べたことをグーグルスライド（Googleのプレゼンテーション作成ソフト）というソフトを使用し、班でひとつにまとめることができるようになりました。今までは自分で調べたものを持ち寄って大きな模造紙にまとめていましたが、今では調べたことがリアルタイムに共有でき、みんなで書き込み、班でひとつのスライドを作成することができます。

スプレッドシート（Googleの表計算ソフト）のチャットのようなものがあり、班の中でリアルタイムに個々の進捗状況を報告できるとともに、教員もそれを見ることができるので、班ごとの考え方や進捗状況をリアルタイムに知ることができます。これは子どもたちが活用するだけでなく教員が評価をする際にも活用できます。子どもたちの思考力や主体的な取組というものもここで評価することができるので、教員としても今後活用していけるのではないかと考えています。

ジャムボード（Googleのオンラインホワイトボードソフト）というソフトも活用しています。今

まではみんなの考えを共有するために自分の考えを紙の付箋に書いて貼りだして共有していました。今はジャムボードを使うことによってリアルタイムに班の考え方を共有し、さらにそれぞれの班ごとに出た意見を全体に共有する、という活用をしています。このジャムボードは、子どもたちが活用しているだけでなく、授業の成果や課題を全体で共有することができるため、教員の研究授業にも活用されています。

タブレット端末は体育の学習でもよく活用されています。授業中はなかなか自分の姿を見ることができませんが、タブレット端末で動画を撮ってもらい自分で振り返りや確認ができるようになりました。

学校全体としては、学校評価のアンケートには本校でも活用しています。児童生徒が入力することで一気に集計の結果が出て評価につながられています。また、タブレット端末のフォームを活用して欠席連絡をしたり、クラスから家庭へのおしらせの連絡方法としても使用しています。

中学では児童生徒会の役員選挙があります。今までは一人一人が投票したものをまとめるというものでしたが、昨年度はすべての学年がタブレット端末で投票をし、立会演説もリアルタイムに動画で配信をしました。今年度は、実際に票を入れるという体験をさせたいということから9年生だけは実際の投票をし、それ以外の学年はタブレット端末からの投票をするという方式でした。

課題としては、教員によって使える先生、使わない先生がいる点で、現在ICT推進教員リーダーが主体となり校内研修を行いながら教員全体の活用ができるように進めています。

SNSへのルールについても、中学になると授業中に授業以外のことをしてしまい、そこに生活指導が入るといった課題もあります。SNSルールを学校として子どもたちに指導していかなければなりません。

○座長

ありがとうございました。

事前に周知のあったとおり、委員の皆様よりご意見を頂戴したいと思います。①ギガスクール構想と、学校図書館の利活用についてお願いいたします。恐れ入りますが、各委員持ち時間3分程度でお願いします。

○委員

今先生方から伺ったギガスクールというものが、私の娘の小中学校時代には影もなかった状況なのでびっくりして聞いていました。夫から聞く会社のような状況がこんなに教育現場で普及しているのだと知りました。

今伺ったITの部分と学校図書館については質が違うという気がしています。学校図書館の中の図書館解放でもパソコンが入り、貸し出しにも利用されていますが、学校図書館にはアナログのようなものがまだまだあります。それらをどう共存させていくのかが課題です。本を手渡していく立場の者が学校の中で使われていくシステムとの間と、どう向き合っていくのか。

まずは知らないことがたくさんあるということが分かりましたので、皆様のお話を伺いたいと思っています。

○委員

私もこのギガスクール構想に関してはほとんど知りませんでした。課題として挙げられた、使う側の教員により差があることや、子どもたちのSNSの使い方に指導が必要とか、現場は大変なのだろうということを感じました。

読書推進を考えるなかで学校図書館はとても大事な場所と感じています。全校の学校図書館に人が配置されパソコンが入りどんどん進化しています。しかし、人は入ったが練馬区の場合は週2日しかいないことが一番ネックになっています。この推進計画の中でも「学校図書館のさらなる利活用を図る」という中で、「人の配置と情報の進化を図る」とありますので、ここに一番力を入れてほしいと思います。せめて時間が短かったとしても、月曜から金曜、いつでも図書館に人がいるという体制になれば、いろいろなことが解決していくのではないかと思います。

先日、図書館開放指導員交流会（図書館開放にかかわっている者たちでの学習会）の委託講座があり、学校図書館に勤めている管理員から話を伺いました。心に残ったことが、子どもたちに辞書の使い方や資料の見方などの説明をしたときに、ひとつのことを調べたときに周辺のことまで知れるということ、辞書を使うことを楽しんでくれたというお話でした。ページめくるだけでいろんなことを知ることができる良さを知ったのだろうと思います。小さいうちに本の楽しさ・本の読み方・辞書の使い方をマスターしていると、大人になっても、苦なく本を読むことができるということを知って、そのようなことを伝えていける学校図書館になるといいなと思います。

○委員

子ども読書活動推進計画にも書かれてあるように、これまでの教育実践で蓄積したものを第一にしながらICTの良さを取り入れていく、いいところ取りをしていくことが大事だと思います

管理員さんが毎日いてほしいというのは本当に学校の願いです。教員が忙しく休み時間に図書館に行きにくいなかで、同じ管理員が毎日いるということで関係ができてくると、子どもたちも安心して本を選んだり相談したりができると思うので、そこはぜひお願いしたいです。

辞書の話がありましたが、多様化という意味では子どもたちがタブレット端末からでも辞書からでも検索できたり調べられることが大事かなと思います。当然実物を手にして開く良さがありますが、調べ学習をするときにいろんな調べ方がありますよ、ということを提供していきたいと思っています。手に入れるのに20万円近くかかるものと聞いておりますが、そのあたりも含めて検討をお願いしたいです。

蔵書の面ですが、蔵書率が100%っていないところに当然予算が多くついています。しっかりと配分をしながら蔵書管理や新規購入等をやってきた学校ほど、逆に100%いってるから予算がどうも少なくなっているようです。そのような状況が改善されてもいいのかなと思います。また、古い本が多くて子どもが見向きもしないような図書館もあると思います。100%という数字だけでなく、そういう状況も改善して興味が増すような環境を整えていければいいかなと思います。

○委員

ギガスクール構想との関係では、学校図書館と連携してタブレット端末をどう活用できるか、実際にはなかなか難しいです。

今後の活用としては子供新聞などが考えられます。今はみんなで一緒に見ることができているわけではないため、これをタブレット端末に落とし込み、配本できれば、子どもたちもよく見ること

ができるようになるかと考えられます。また学級文庫には限りがあるので、タブレット端末に同様な機能をもたせられれば子どもたちは朝読書などに活用できます。

今では子どもたちはタブレット端末を検索することに慣れてきていますが、本の情報を探すのに難しさを感じたり時間がかかったりすることが多くなっています。また、パソコンに出てくる情報には正しいものもあれば違うものもありますし、言葉が難しいものもあります。今後は図書館に行って調べ学習を行う、情報の正誤を確認する場所が学校図書館ではないかと思えます。そこをうまく連携できれば学校図書館の役割も増してくるのではないかと思えます。

逆の活用方法として、小学生にはインターネットのことは難しいけれど学校図書館の本はとてもわかりやすく正しい情報が詰まっているため、学校図書館で調べたことを今度はインターネットに入って知識を深めていく、そのような使い方もあるのではないかと考えております。

○委員

まずは質問させてください。小中学校ではタブレット端末は自宅に持ち帰りできる状態でしょうか。SNSなど好きなソフトを入れられる状態でしょうか。

○副校長

基本的に持ち帰ります。好きなソフトは入れられません。

○委員

なぜ他のソフトを入れられないままの状態なのでしょう。

個人的には好き放題入れさせ、そのなかでSNSとの付き合い方、フェイクニュースなどに対してどう正しさを知るか、メディアリテラシーをいかに実感していくかが大切になっていくと思っています。自ら入れたものであればそれによるリスクを含めて理解の度合いが深まるであろうと考え、学校のタブレット端末に入れられないのは何とかならないものかと思うのです。

リスクがあるので一朝一夕にはいかない、現場が大変であることなどは重々承知しています。ソフトを自由に入れることの基本方針について、基本OKだけれどこれだけはダメだよという禁止規定でやるのか、基本ダメだけれど許されるものだけ使えるとするのか、その扱いは前者であってほしいと願っています。

危惧することとして、パソコンやキーボードに対する抵抗感が若者の間で増えてきていると感じます。手元のタブレット端末やスマホは、パソコンや富岳のようなスーパーコンピュータとも地続きになっていると実感できるようなプログラム・教育の機会があればいいなと思います。

学校図書館もギガスクール構想で直結していると思いたいのですが、利用できる日が週2回ではあまりに残念過ぎる状態です。図書館が常に開いていて利用できる状態というのを目指していただきたいです。また、学校図書館に行ったとき、うわぁ楽しそう！と思えばよいのですが、実際にはドヨンとした空間が広がっていて開いていても意味がないということにならないよう、先ほど蔵書の予算の件がありましたが、逆効果になっては残念です。リアルな楽しい場所として、スタッフというところに予算配分されるといいなと思っています。

現時点で学校図書館とタブレット端末はどれだけつながっているのでしょうか。家から図書館の資料にアクセスできるようには全くなっていないわけですね。また、電子書籍を購入したとか電子辞書の利用などについて、公立図書館とは別予算で別事業になっているのでしょうか。同じ情報教育だと思うので一貫したものになっていけばいいなと思っています。

○委員

特に小学校の図書館には図書館管理員・司書が月曜日から金曜日までいつでもいてほしいです。娘の小学校では2年前の4月に支援員が決まっておらず、1学期全部図書室の使い方などを教えてくれる方がいない状態がありました。新型コロナウイルス感染症流行前にいらした支援員は、時間分割など工夫しながら毎日来てくれていました。子どもたちとの距離も近くなるので、マナーや本の紹介をしてくれる人、特に子どもたちがあまり手に取らないような本を薦めてくれるような人が毎日いた方が、子どもたちにとってよいのではないのでしょうか。残念ながら今は週2日しか来てもらえていない状況です。

中学校の方は、管理員と図書委員の子どもたちがコミュニケーションをとれているので大丈夫だろうと思っています。

小学校の話に戻りますが、わたしは読み聞かせサークルに入っており、おはなし会をする機会があります。そこでスクリーンに映したときと実際の本を使って聞くときでは、子どもたちの表情・集中力が全く違うのです。実際の本を見ておはなしをした方がいいのだなと思います。デジタルだけにすべてを頼るのではなく、学校の授業でも読み聞かせでもデジタルとアナログとを融合させていけたらいいなと思っています。

○委員

小学3年生の女子の親です。実際にタブレット端末を利用していますが、ふだん手を挙げて発言しない子が入力することはでき、1回に限らずいくつでも発表できる、それらを授業参観で親が可視化でき、すごい、これは生き生きしているぞ、と思いました。その反面、私は正直タブレット端末を厄介だとはか思っています。タブレット端末とは名ばかりで、大人でも苦痛なほど重いです。重さが約1kgあるランドセルにあのタブレット端末と他の教科書なども持ち帰り、ひっくり返ってしまうほどの重さを小さな身体で毎日背負い、まるでゴルゴダの丘のごとく4階の教室に上り下りをするというのは苦痛でしかないという状態です。

毎日持ち帰りを指導され宿題等をチェックできるのは、今まで連絡帳を書いていた時間等を他に充てられて効率的だし文字を書くのはそれほど得意ではないのでいいのですが、そのためにだけあの重さを堪えなければならないのかと考えてしまいます。ロサンゼルス市の公立小学校に娘を通わせていたことがあるのですが、リモートワーク・リモートスクーリングというものがあって、各家庭にある端末を利用していました。兄弟が多いなどの事情のある家庭へは、学校で何台か用意して貸し出しをしていました。たしかに個人情報や様々な面で危険を伴うものではあったと思います。ただ、その危険性を怖がりすぎて、ただでさえ重い荷物を背骨がずれて神経痛が出ている子どもがいるという新聞記事等で取り上げられているなか、大人の怖さを子どもに負担させてしまっている感じがして、わたしは好きになれないです。

だいたいの家にあると思われるスマホやタブレット端末やパソコンなど別のインターネットへのアクセス手段を持っていて、わざわざ持ち帰ったタブレット端末でアクセスすることはあまりありません。タブレット端末がやってきたことで、朝読書の時間がタイピング練習の時間に置き換わってしまったりとデメリットの方が大きいようです。携帯電話を買い与えるときに家でするような約束事もなしにタブレット端末がやってきて、これからは授業に使います、使い方はこうですよと

始まりました。ITリテラシーを持たず何のベースも土台もないところにタブレット端末がやってきた、それを使って何がしたいのか、それを生かすメリットは何なのか。保護者もわからないけれど先生方も子どもたちも分かっていないのではないのでしょうか。少なくとも、それを生かすことで将来に向けた子どもたちへのメリットを保護者に提示し、だから重いけど持って帰ってねというのであればわかります。それ自体が目的ではなく、そこで得たものを使って将来何かをするという話だと思えるのです。そこが見えないまま何をやっていますといった発信ばかりがあって、子ども側からの主体的なものを掘り起こすところに繋がっていない気がしています。

○委員

子どもがまだ2才と4才なので学校の事情がよく分からないところがあります。

保育園も電子管理になってきて、連絡帳などをスマホで送ったりしています。親としては電車の中からでも送信できるなど助かっている部分もあります。

1か月前くらいに保育園の玄関前に図書館的なものができ、子どもたちには本がいつでもある状態となりました。本棚をいくつか並べたもので、子どもたちが自由に触れることができます。本から離れられずなかなか帰れなくなりましたが、親も子どもが立ち寄る時間を取り入れた日々のローテーションを組立てたり、子どもにも本を取り入れた生活の流れができるようになりました。こういったことから図書館が身近にあればもっといいのではないかと思いました。

自分の経験で先生が好きだから授業も好きということがありましたが、それは本にも言えることだと思います。先ほどの委員の話を知って、親しみやすい人がいて場所があって、というのがいいなと思いました。

司書の仕事についてよくわかっていないところがありますが、子どもの聞きたいこと求めることにきちんと的確に対応してくれる人がいてくれると、もっと結びつきやすくなるのではないかと思います。

○座長

皆様、貴重なご意見をありがとうございました。

いろいろなテーマがあったと思いますが、まず「タブレット端末がやってきた・降ってきた」状況に対して、学校現場もそれぞれ試行錯誤しながらメリットを感じつつ、メディアリテラシーの点では課題が大きいことが浮き彫りになったと思います。

興味深い視点としては、タブレット端末と学校の図書館、読書とかかわるものがリンクしていない、という点もかなり喫緊の課題かと思います。たとえば、タブレット端末を使って本の感想を共有したり、チャットルームのようなコミュニティができる可能性もあると思いますが、現実にはタブレット端末はあくまでもタブレット端末、しかも重くて厄介、おうちに帰るのも大変といった、子どもを育てているからこそその日々の蓄積の中からの貴重な意見だったと思います。

複数の方がご指摘されていたのは、図書館の司書の人員配置の課題だったかと思います。週2回、あるいは学校現場で関わっている先生方からも出されていた、目標を到達している学校の予算が圧縮される問題、活用している学校にプライオリティがかかってしまう数式も何とかならないかという課題もありました。管理員の人員配置に溝があり、人を通してぬくもりのある本とのつながり方や手に取ることのできる実際の本の方が子どもたちの食いつきがよかったとか、そういった指摘が

あるなか、管理員の人員配置に関しては事務局の方から現状の補足等はいかがでしょうか。

○事務局

今様々のご意見をいただいて、管理員が現場の一職員としては毎日いることが一番理想のことだと思いますので、いただいた様々ご意見等を参考にして検討してまいりたいと思います。

○事務局

学校図書館における司書の配置については様々な変遷を経て、現在全校同じ形で配置できているというところではあります。図書館から派遣する「支援員」と現在の「管理員」が学校によってどちらかが配置されていたものを、教育委員会として現在の「管理員」に一元化したというところではあります。

また、紙の貸出しカードから電子的な図書管理ができるようにするシステム化も行いました。学校図書館の充実に向けて第5次推進計画にどう謳っていけるのか、今日皆さんから出た意見を反映していきたいと思っています。

タブレット端末と図書館のリンクということについて、第5次推進計画では大きな課題だと思っております。タブレット端末が学校で使われ始めたなかで、図書館とどうリンクできるのかは次の課題です。電子書籍も特に若い人たちを中心に多く利用されていますが、まだ課題がいろいろあり研究を進めているところではあります。ひとり1台のタブレット端末を持つようになったなかで、電子化について、図書館側も学校図書館と共に考えなくてはならないところではあります。

教育委員会として、今日ご指摘いただいたことを盛り込んでいけたらと思っています。ご意見ありがとうございました。

○座長

ありがとうございました。

タブレット端末が「降ってきた」ものから、多様な子どもたちの主体的な調べ学習につながるようになればと思います。

続きまして、②「中学生の読書活動推進について」に移ります。

これは前回の推進会議で委員から、中学校の学校図書館の貸出数が小学校に比べて少ないのではないかというご意見がありました。そこで、中学校の読書推進について、委員の皆様のご意見をお願いします。恐れ入りますが、各委員持ち時間3分程度でお願いします。

○委員

私がかかわっているのは小学校が中心なので、中学校のことはよく見えておりません。

さきほどのお話の中に、もしかしたら中学校では生徒が自主的に行動したり大人に近い年齢になっていることから、小学校ほど手厚くでなくてもなんとかかなっているのではないかと、というお話がありました。半面、周りの中学生がいるお母さん達からは、中学校だからこそ、より中学生にふさわしい本の紹介をして欲しい、日数的にも時間的にも手厚くしてほしいという要望も聞いています。思春期で大人に近くなっていく時期に必要な本に出合えるような、悩みを相談できるような、練馬区でいえば管理員といった人の手配が必要だなと思っている保護者がいるということは確かです。そこも含めて皆さんのお話を伺っていききたいなと思っていますのでよろしくをお願いします。

○委員

中学校の学校図書館はよく見えていませんが、学校図書館を考える会にいる立場で、中学校での授業支援がどのくらい行われているか調べています。

2か月調査している中で授業支援が1回か2回しかありません。管理員は小学校と同じ週2日配置ですが、授業支援は少ないし休み時間なども、あまり使われていないようです。休み時間に行ったとき人がいなかったりするためかと思います。中学校では図書館にいつでも行けて本を選んだりちょっと相談したりできる状況が、ひよっとしたら授業支援よりも大切かなと思いました。中学校では科目ごとに教員が変わるのでなかなか利用してもらえないと管理員から聞きました。小学校のようにうまく使ってもらおうことのアピールができないということもあるようです。

「本の探検ラリー」で中学校に行くと、よく本を読んでいて、読む力があると感じる一方で、全く読もうとしない子もいて、読書力に大きく差のある子どもたちに本を薦めるのはとても難しいのだらうと思います。力のある管理員の方が入るといいなと思います。毎日図書館に人がいて開いていることが大事で、利用率も上がるのではないかと思います。

○委員

中学校の実情はよくわかりませんが、はたから見ても部活や塾や受験などで忙しい子どもたちに、どうやって本に興味をつなげていくのかは課題だと思います。

子どもによって本を読むか読まないかの差が非常に大きいです。そんな実情があるなかでタブレット端末の可能性は小学校以上に中学校の方があるのだらうと思います。

タブレット端末はとにかく重い、中学生くらいになれば相当体力もついてきますが、小学生がカメラ代わりに使うのは大変なことです。タブレット端末そのものを軽いものに変えてほしいというのがあります。

○委員

除籍図書を毎年区立図書館からいただいており担当者も感謝しておりました。ありがとうございます。

ただ課題としては学級文庫のための予算がないため十分な図書を揃えることができず、また子どもが手に取らないような古いものは処分しており、その結果本校の蔵書率は98%となっております。

中学生は図書ばなれがひどくなっていることや図書の時間がなくなっているということがあります。そこで図書館の活用・読書の推進をどのようにしていくかを考えています。本に慣れ親しむために国語の授業で本の紹介やビブリオバトルを用いています。また文学的な教材と入れ替えて「文庫本一冊読み」というものを行っています。教材費として本を生徒に購入してもらい、しっかり読み最終的にレポートを一人一冊にまとめたものを作っています。

また朝読書での課題図書をこちらから指定して本に慣れ親しんでもらうようにしています。この課題図書や文庫本1冊読みなどは貸し出し図書には含まれないので、もしかしたら中学校の図書貸し出し数が減っている原因の一つになっているかもしれません。もし貸し出していたらおそらく500冊くらい増にはなるのだらうとのこと。

そのほかにも一般的な調べ学習で図書室を利用しています。「本の探検ラリー」も行っています。中学生になると図書委員会というのがあり、積極的に本に慣れ親しんでもらおうということで、お昼の放送での本の紹介やイベントに取り組んでいます。イベントでは図書委員と管理員がアイデアを持ち寄り協力して行っています。読書週間、SDGsの本を読もう、何行かのあらすじを書いた図書委員オススメ本の福袋、書名が見えないようにした覆面本、本のクイズなど企画して工夫をしています。イベントでは図書委員が自分から友達を連れてくることもあります。本を選ぶ子は自分の普段読まない本を手に入る機会になり、図書委員には自分のおすすめ本を手にとってもらう喜びにつながっています。このような取組を行うことでまず図書室に来てもらい、中学校での本の活用を進めています。

○委員

中学生の読書活動推進ということについて、図書館の利用を進めるということもあるが、対象をしっかり分ける必要があるのではないのでしょうか。本に興味のない子を引っ張り込むための活動と、本好きな子が新たな本に出合えるよう蔵書を充実するというのは全然違うアプローチになるだろうと思います。本に興味のない子を引っ張り込む方が重要だと思います。

また、子ども同士でおすすめや紹介していくことも必要ですが、他の子にはわからない、自分の悩みには引っかかるテーマがあったとしたら、友達同士では言えなくても司書教諭からのおすすめであれば入り込めると思います。みんなの前ではその本が好きとは言えなくても、先生個人との関係であれば悩みに関する話題が出せると思います。そのようなテーマの本をおすすめできる、信頼できる先生がメッセージを出す、例えば図書館内のチラシや展示やタブレットのメッセージでもよいのですが、そのような機会があるとよいと思います。

もう一つは、ラノベコミックスがきっかけになることもあると思います。ひょっとしたら多少のいかがわしさや若干の怖さがあるものであっても触れる機会はあってほしいと考えています。読書活動で取り上げられる本は「いい子ちゃん」なものですが、興味のない子を引っ張り込むためには、制限があるとないのでは信頼性が全く変わってくると思います。そのためにも司書の先生が必ずいらっしゃるとかいうのは大事なことになるのではないのでしょうか。

さきほど管理員の話がありましたが、管理員とか非常勤があたりまえでなく、司書の教員が常勤であるという状態が理想です。目標として掲げておいてほしいと思います。

○委員

上の子が通う中学校は何年か前荒れていた状況でしたが、バラバラになっていた図書などを保護者有志が片付けて使いやすい図書室になったと伺っています。今は「保護者の会」という形で図書支援を行っていて、開けているときは保護者と図書室の管理員さんで本の管理や貸し出しをしています。今年度新しい本が500冊くらい入ったのですが、なかなか活用されていない残念な状況であります。選書に先生・保護者が関わり、子どもたちのリクエストも入れた新しい本がいっぱいあるなかで、放課後とか短時間でも開けてもらうともっと利用できるのかなと思います。

息子が通っている小中学生を対象としている塾では読書を推進していて独自の「読書検定」というものを行っています。年2回課題図書を読んで検定に臨むというもので、ふだん読まないような本も読めるようになっていきます。塾が読書検定を行っている理由として読書を通して語彙力をつけ

ることがあり、積極的に読書の推進を行っているそうです。

学校や区の図書館でも、小学生向け・中学生向けに独自の読書検定のようなものやってみてもいいのかなと以前から思っていました。

○委員

さきほどの委員の発言で中学生は意外に本を読んでいるということを知り、あ、そうだろうなという感覚を持ちました。自分の中学生時代（私学）を振り返ると通学時間が大事な読書の時間でした。スマホもない時代、周りも本を広げている人がたくさんいました。中学生くらいになると好きな本がはっきりしてくるし、好きな本のボリュームも大きくなり、自分の本が欲しくなって、そのうち購入した本も増えてきていました。

こういったこともありまして、中学生においては数字を追うことがどれほどの意義があるのかな、それほど数字にこだわる必要はないのかなと思っています。でも放っておいていいわけではなくて、学校の図書室や図書館がこういった役割を担っていくべきかといったときに、先ほどのお話にあったような、本を好きな子たちがいろいろイベントを企画する、本を読まない友達に働きかける、それは自己実現の場にもなります。大人ではなく子どもたちが主体的に何かを発信する場所であったり、教室に居づらい子どもたちの居場所であったり、何冊読んだかではない役割が本にはあるのではといったところに着目したらどうかとわたし自身は思っています。

さきほどあった読書検定など私は胸がときめく感じがします。どれだけ本を読んでいて、どれだけそれに対して考察を持っているか、中学生くらいであればそういう子どもたちに光を当てる場所があるというのも図書館の役割にあってもいいのかなと考えます。

○委員

わたしは正直なところ、幼い頃から、大人になってもあまり本を読んできていませんでした。そんななかでも仕事を機に本の大事さ、意味合いを知って今この場にいるところです。

今は保育園児に親がある程度の情報操作をしています。子どもは絵本が情報収集の手段になっているので興味津々ですが、少し大きくなったら親が見ていないところで情報収集していくと思います。いろんな価値観をもってくる中で、小中学生になった子どもに本の必要性や大事さを今自分がどう言葉がけができるのか今から考えています。先生たちがどのように声をかけて読書をすすめているのか興味をもっています。

○座長

皆様、貴重なご意見をありがとうございました。

やはり中学生にもなると大人並みに読書をする子どももいれば、本からますます遠ざかる子どももいる。そういった多様性のなかで、本の関わりが貸出冊数などの数値では表れない実態を把握したうえで議論を進めていくことも必要なのではないかと、という貴重なご意見だったように思います。

また、本との出会いの場を確保する、先生や友達や親でもない別の大人との関わりを何らかの形で確保するような機会も引き続き課題としてあげられるようにとのご指摘だったように思います。

ほかに追加のご意見や質問等ある方はいらっしゃいますでしょうか。

○委員

小学校の図書室における自分の立場の範疇においては、子どもたちとのやりとりを密接にとか、なるべく仲良く関わるようにずっと活動してきました。しかしながら、学校でどんなものが配布され、どのように活用されているのか、どう持ち帰るのかといったタブレット端末についての情報が少ないことを痛感しました。図書室の開放時間にタブレット端末を持ってきて本を借りる子がいないので、わたしは学校の中にもその実物を見ることはありませんでした。

そこで素朴な質問ですが、練馬区ではタブレット端末を購入して配布しているのかレンタルなのか、を教えてください。レンタルならば、いつか期限が切れるときに子どもたちに負担の少ない新しくて軽量の、より保護者たちから理解を得られるものに変わる時が来るかもしれません。タブレット端末の現在地はどういうふうになっているのでしょうか。

○事務局

タブレット端末については、教育施策課が担当しています。

事務用パソコンは購入でなくリースで導入することが多いです。機器というのは更新もあり、購入してしまうとそのまま古くなってしまふということがあり、タブレット端末もリースであろうと考えます。

これは後日確認してご連絡します。

※追記:子ども達が利用しているタブレット端末は令和3年2月から5年間のリースで導入している。

○委員

リースです。2年生のときに配布されたタブレット端末には卒業時までのシールが貼ってあります。

ここからは聞いた話ですが、公立の中学校に進む子どもたちは小学校で使っていたものをそのまま中学校へ持ち越すという話も聞いています。今後どうなるかわかりませんが、買ったものではないけれど割と長い期間付き合うことになるのだろうと認識しています。

○委員

この先は計画した部署の方たちのご判断になると思いますが、これまでの話を聞いて、小柄な1年生たちが重いものを持っていてかわいそうで、せっかくのいいもののはずが最初の出会いが辛いものになっているという印象です。

○委員

先生方もその管理にすごく苦勞されているようです。小さい子がいつ壊すかと心配なので決してランドセルから出して手に持って歩かないようにとか、タブレット端末が教室においてあると鍵をかけなければいけないので何としても持ち帰りなさいなど、高価な大事なものの位置づけになっているようです。

○委員

仕事で得た知識ですが、更新をしたいという検討は常にされているようです。経産省や文科省、内閣府などの協議会では必ず話題になりますが、あとは現場での話し合いでという方向です。民間委員からは必ず重さをどうするとか、5年もリース契約が続くのはいかがかという意見が出ます。5年というのは民間的にはありえません。自分の携帯電話は2年か3年で更新しているのですから。

○委員

タブレット端末というと手軽に持っていていろいろできるとはいえ小型のパソコンです。もっと軽いものもあるかもしれませんが、とにかく重さがあります。

○座長

追加のご意見や質問等ある方はいらっしゃいますか。

○委員

何度も話に出ていますが、とにかく毎日学校図書館に人がいて欲しいです。今は業務委託で委託先に雇用されている人なので、「司書」という言葉が使えないので「管理員」という名前がついています。

学校図書館にできるだけ早く、直接雇用の「司書」が、毎日入れるように、「学校図書館への人的支援および情報化により、(中略)学校図書館のさらなる活用を図ります」(子ども読書推進計画より抜粋)というところを目指したいなと思います。

また、電算化されたことでいろんなことが数値化されました。しかし蔵書管理も蔵書数や分類ごとの冊数、貸出冊数など数だけ見るのではなく、学校によって分類の仕方も違ったりしていますので分析することが必要です。単純に情報化して出た数字だけを信じるのではなく、これが何を意味するのか分析し、ますますきちんと見ていかなければならなくなるのではないかと考えています。

○委員

図書室はいつも開いていて、そこにはいつも人がいるといいですねと皆さんから出されてきました。うちの学校は昨年からはパソコンが入りシステム化されました。そのためだと思いますが、今月か来月くらいから図書室に鍵がかかるということです。理由は学校から聞いていないですが、機械が入ったからかもしれません。

人がいてほしい、開いてほしい、そこに子どもたちが活力を持って集まりたくさん活用してほしい、というのが希望ですが、管理をされていく、閉めてしまうという方向に動いています。わたしたちはこの希望をちゃんと事務局を通して、区にお届けしていけるようでありたいと本当に思っています。

○委員

この場ではタブレット端末のことが理解されているということもあるかと思いますが、予算をつけるためには一般区民に理解してもらう必要があります。そんなことにお金使う必要がない、司書

なんてまた給料が高い公務員が増えるんでしょう、というような話になりがちです。そういった区民に対して、いかに司書が入ることで価値があるのかを広報していくという事業、予算が必要ではないでしょうか。

支持は調達しないと手に入りません。支持調達のための行動をも我々はしていかなければならないとも考えます。役割的にはどこの部署が何を予算化してくれればいいのかというところは事務局の方に引き合わせをしていただくしかないのですが。

○座長

ということで、ご検討いただければと思います。それでは事務局の方から閉会の準備をお願いします。

○事務局

第11期の第五回の会議は、令和5年2月前後に開催する予定です。目標3「高校年代の読書活動の推進」、目標4「支援を必要とする子どもへの読書活動の推進」、目標5「読書活動推進の基盤づくり」を議題とする予定です。日程調整を行ったうえで正式な日程が決まり次第、開催通知を送付させていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

○座長

それでは、第11期第四回練馬区子ども読書活動推進会議を終了いたします。ありがとうございました。